

「後の者が先になり」

ヨハ 10 : 40~42、ルカ 13 : 22~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① 宮きよめの祭りでの出来事

* ユダヤ人たちの間に分裂が起こった。

* ユダヤ人たちは、イエスに石を投げようとした。

* イエスは、そこを無事に逃れた。

* 十字架の死の約4ヶ月前のことである。

② イエスは、エルサレムからペレアに移動する。

* そこでの奉仕は、収穫が多かった。

* 後の者が先になった。

③ ペレアに滞在していたイエスのもとに、ラザロが病気だという知らせが入る。

④ イエスは、ペレアからベタニヤに向かう。

⑤ きょうのルカの箇所は、恐らく、その途上の出来事であろう。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 112 エルサレムからヨルダン川の東への移動

§ 113 ペレアからエルサレムに向かう途上での教え

2. アウトライン

(1) 祝された奉仕 (ヨハ 10 : 40~42)

(2) 悲観的な見通し (ルカ 13 : 22~30)

(3) 十字架の死に向けての弟子訓練 (ルカ 13 : 31~35)

3. 結論 :

(1) 再臨の条件

(2) 後の者が先になり

後の者が先になった経緯について、学ぶ。

I. 祝された奉仕 (ヨハ 10 : 40~42)

1. 40 節

Joh 10:40 そして、イエスはまたヨルダンを渡って、ヨハネが初めにバプテスマを授けてい

た所に行かれ、そこに滞在された。

- (1) 場所は、ヨルダン川の東、ペレアである。
 - ①ここは、サンヘドリンの支配が及ばない地区である。
 - ②バプテスマのヨハネの活動は、主にペレアで行われた。
 - ③ここは、イエスが公生涯を始めた場所でもある。
 - ④イエスは、公生涯の終わりにそこに戻られた。
 - ⑤そこは、中央の宗教的権威からは隔離された、孤独な場所である。

- (2) バプテスマのヨハネは、その地で洗礼を授けていた。
 - ①これは、ヨハネに付くバプテスマである。
 - ②洗礼を受けた人々は、ヨハネの教えを受け入れた。
 - ③洗礼を受けた人々は、メシアが登場した時、その方を信じる決意を表明した。

2. 41～42 節

Joh 10:41 多くの人々がイエスのところに来た。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行わなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。

Joh 10:42 そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた。

- (1) その地で、多くの収穫があった。
 - ①ユダヤやエルサレムでの状況とは、好対照である。

- (2) 信じた人たちは、バプテスマのヨハネの影響を受けていた。
 - ①ヨハネは、奇跡を行ったわけではない。
 - ②ヨハネは、メシアについて証言し、それがすべて真実であった。
 - ③ヨハネは、メシアの先駆者としての使命を十分に果たした。

II. 悲観的な見通し (ルカ 13 : 22～30)

1. 22 節

Luk 13:22 イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。

- (1) エルサレムへの途上、ペレアの町々村々を通りながら、教えた。

2. 23～24 節

Luk 13:23 すると、「主よ。救われる者は少ないのですか」と言う人があった。イエスは、人々に言われた。

Luk 13:24 「努力して狭い門から入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろう

としても、入れなくなる人が多いのですから。

- (1) ひとりの弟子がイエスに質問した。
 - ①「救われる」とは、イスラエル人が神の国(メシア的王国)に入るということ。
 - ②質問の理由は、イエスが説く神の国のメッセージに応答する人が少ないから。
 - ③ユダヤ人の指導者たちはイエスのメシア性を拒否した。
 - ④民衆も、指導者たちの意見を鵜呑みにしていた。
 - ⑤個人レベルの救いを提供しようとするイエスの働きは、終わりに近づいていた。

- (2) イエスは彼に答えた。
 - ①他人のことはいいから、自分の救いのことを心配しなさい。
 - ②「2つの道」のイメージは、ユダヤ的文書にはよく出て来るものである。
 - ③ここでは、「狭い門と広い門」の対比がある。
 - ④広い門とは、パリサイ派の教えである。
 - *ユダヤ人として生まれたなら、神の国に入れる。
 - ⑤狭い門とは、イエスの教えである。
 - *イエスをメシアと信じる信仰によって、神の国に入れる。
 - *「努力して」とは、業による救いのことではない。
 - ⑥今は「恵みの時」であるが、それが終わる日が来る。
 - *そのことを、宴会を催した主人の例話で教える。

3. 25～27 節

Luk 13:25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。

Luk 13:26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』

Luk 13:27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい。』

- (1) 神の国は、ユダヤ的には「宴会」にたとえられることが多い。
 - ①救われる目的は、神の国に入るためである。
 - ②神の国に入ることが、宴会の席に付くことで表現されている。

- (2) 家の主人は、立ち上がって戸を閉める。
 - ①恵みの時が終わると、戸は開かない。
 - ②外に立って戸をたたく人たちは、イスラエル人たちである。

- ③いくら懇願しても、戸は開かない。
 - ④主人は、「あなたがたがどこの者か、私は知らない」と答える。
- (3) そこで彼らは、主人と自分たちは密接な関係にあるとアピールする。
- ①「私たちは、ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました」
 - ②これは、その時代のユダヤ人たちに対するイエスの奉仕への言及である。
- (4) 主人は、彼らを家の中に入れていない。
- ①「私はあなたがたがどこの者だか知りません」
 - ②「不正を行う者たち」
 - ③「みな出て行きなさい」
 - ④今イエスを信じなければ、手遅れになる日が来る。
 - ⑤その時代のユダヤ人たちにとっては、紀元70年がその日となった。

4. 28～30節

Luk 13:28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちが入っているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ぎしりしたりするのです。

Luk 13:29 人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。

Luk 13:30 いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」

- (1) イスラエルの中の信仰者たちは、神の国に入っている。
- ①アブラハム、イサク、ヤコブ
 - ②すべての預言者たち
 - ③彼らは、真の信仰者たち(イスラエルの残れる者たち)である。
- (2) しかし、イエスを信じなかった者たちは、外に投げ出される。
- ①裁きの苦しさが、「泣き叫んだり、歯ぎしりしたり」という言葉で表現される。
- (3) 異邦人の救いが預言されている。
- ①「東からも西からも、また南からも北からも来て」とは、異邦人のことである。
 - ②神の国で食卓に着くとは、救われていることの描写である。

- (4) 異邦人とユダヤ人の立場が逆転する。
- ①「今しんがりの者」とは、異邦人のことである。
 - ②「いま先頭の者」とは、ユダヤ人のことである。

Ⅲ. 十字架の死に向けての弟子訓練（ルカ 13：31～35）

1. 31 節

Luk 13:31 ちょうどそのとき、何人かのパリサイ人が近寄って来て、イエスに言った。「ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。」

- (1) ヘロデとは、ヘロデ・アンティパスのことである。
- ①彼の領土は、ガリラヤとペレアである。
 - ②彼はバプテスマのヨハネを殺した。
 - ③イエスのことを、バプテスマのヨハネが復活したと考えている。
 - ④イエスを殺そうと思っているというのは、正しい情報であろう。
- (2) イエスを殺そうとしていたパリサイ人が、なぜイエスを守ろうとしているのか。
- ①イエスをユダヤ、エルサレムに戻そうとしている。
 - ②そこは、サンヘドリンの管轄地域である。
 - ③そこなら、イエスを逮捕することができる。
- (3) しかしイエスは、ご自分のタイムテーブルに従って行動される。
- ①エルサレムに上るとしたら、ご自分の時と目的に沿ってそうする。

2. 32～33 節

Luk 13:32 イエスは言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、悪霊どもを追い出し、病人をいやし、三日目に全うされます。』

Luk 13:33 だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありませんからです。』

- (1) イエスは、パリサイ人とヘロデの関係を見抜いている。
- ①ヘロデに告げよ。
 - ②「あの狐」（女狐）（あるいは、ヘロデヤを意味しているのかも知れない）
*イエスが人間を表現するために用いた最も悲しい言葉である。
- (2) イエスは、いかなる権威にも屈することはない。
- ①「きょうと、あすとは、」は、格言である。短い期間という意味。

*今しばらくは、なすべき奉仕に励むということ。

②「三日目に全うされます」とは、最後には使命をすべて終えるという意味。

*受難を指した言葉である。

(3) メシアは、ガリラヤやペレアでは死なない。

①神から遣わされた預言者たちは、エルサレムで殺されてきた。

②今回も、預言者の中の預言者である方が、エルサレムで死のうとしている。

③これは、エルサレムに対する糾弾の言葉である。

④ペレアにおいて十字架の影がイエスを覆い、それがエルサレムで成就する。

3. 34～35 節

Luk 13:34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

Luk 13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。」

(1) ここでルカは、イエスがイスラエルの民を拒否したことを記録している。

①エルサレムとは、イスラエルの民を象徴する言葉である。

②イスラエルの民がイエスを拒否したので、イエスも彼らを拒否する。

(2) イエスは、涙なしにエルサレムを拒否したわけではない。

①イエスの愛と優しさに溢れた奉仕（めんどりがひなを翼の下にかばうように）

②エルサレムがイエスを拒否した（頑固な姿勢）。

(3) エルサレムの町も神殿も、荒れ果てたままに遺される。

①紀元70年以降、そうなった。

(4) 『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません」

①これは、再臨の預言である。

結論

1. 再臨の条件（ルカ13:35）

Luk 13:35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません。」

- (1) 「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」(詩 118 : 26)
- (2) イエスがエルサレムに入場する際に、群衆はこの聖句を引用した(マタ 21 : 9)。
- (3) イエスは、公生涯の最後に、再度この聖句を引用した(マタ 23 : 37~39)。
- (4) 再臨の条件は、ユダヤ人たちがイエスをメシアと信じ、その到来を歓迎すること

である。

- (5) 再臨の希望を語りながら、ユダヤ人の救いに無関心なのは、一貫性がない。

2. 後の者が先になり

- (1) ペレアのユダヤ人とエルサレムのユダヤ人の対比
- (2) 異邦人とユダヤ人の対比
- (3) ユダヤ人たちは、なぜイエスを信じなかったのか。
 - ①数百年にわたるパリサイ的教えの影響
 - ②口伝律法を垣根のように巡らせたので、聖書のメッセージが分からなくなった。
 - ③イエスをメシアと認識できなくなった。
- (4) イエスの教えは、革命的なものであった。
 - ①彼らは、アブラハムの子孫であれば、神の国に入れると思っていた。
 - ②さらに、ユダヤ人だけが神の国に入ると思っていた。
 - ③イエスが教えた異邦人の救いは、彼らにとっては驚くべき内容であった。
- (5) 私たちへの適用(1コリ 1 : 26~31)

1Co 1:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。

1Co 1:27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。

1Co 1:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

1Co 1:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

1Co 1:30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。

1Co 1:31 まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。